

# 「悲しみだけの場所じゃなかった」故郷を再び集える場所に 被災“大川小”の若者たちのその後とは

9/14(水) 11:23 配信 0  

**tbc**東北放送



東北放送

特集は復興の現在地です。東日本大震災の発生から11年半が経ちましたが、当時の子どもたちの中には葛藤を抱えながらも、震災伝承や故郷の再生のために取り組み始めた人がいます。津波で大きな被害を受けた宮城県石巻市の大川地区出身の若者たちの新たな挑戦を取材しました。

## ■「奇跡の少年」の葛藤

児童、教職員84人が犠牲となった石巻市の震災遺構・大川小学校です。

8月、お盆の時期に合わせ、手作りの紙灯ろうに明かりを灯す催し「おかえりプロジェクト」が初めて開かれました。企画したのは、大川小出身の若者たちが中心となって作った団体「Team（チーム）大川未来を拓くネットワーク」です。

Team大川未来を拓くネットワーク代表 只野哲也さん（23）：

「若者がいっぱい来るかという、今回はまだ1回目なのでそれなりかなと思いますけど、徐々に2回3回と続けているうちに若者が増えたらいいなと思います」

代表の只野哲也さんは、期待と不安を口にします。

震災発生当時の只野哲也さん（当時11歳）：

「友達がバツと波にのまれて行って」

震災当時、大川小の5年生だった只野さん。津波にのまれながら奇跡的に助かりましたが、家族や多くの友人を失いました。あの日の真実をメディアの前で発信し続け、大川出身の仲間たちと被災した校舎を残すための活動もしてきました。しかし・・・

只野哲也さん：

「すごく嫌な言い方をすれば、やらされているような感覚で取材に応じてきて、仲間や亡くなった同級生、友達にも失礼だと」

「奇跡の少年」と呼ばれた只野さんは、一時、メディアや大川地区と距離を置きました。

## ■「自分が語り続けなければ」

しかし広島で原爆の恐ろしさを伝える語り部や防災の活動をする同世代の若者らとの交流を経て、自分が語り続ける重みを再認識したと言います。

只野哲也さん：

「そんなに簡単に何でも思うようにいくのだったら、こんなに悩んでいないし、ここに俺がいる必要もない。うまくいかないのが普通なので、慌てず諦めずに地道にコツコツ時間をかけてやるしかない」

今年2月、同級生や同じ思いを抱く仲間たちと「Team大川未来を拓くネットワーク」を立ち上げました。県内のほか四国や九州などにも足を運んで、講話や意見交換を行い、震災伝承や防災について理解を深めてきました。

そして今年3月11日に大川小で行われた「大川竹あかり」にヒントを得て、追悼の意味に加え、若者が再び集うきっかけになればと「おかえりプロジェクト」を発案したのです。



## ■「子どものいのちを真ん中に置いて」

Team大川未来を拓くネットワーク副代表 今野憲斗さん：

「灯ろうひとつひとついろいろなメッセージを見ながら設置していくと、すごく胸を打たれるメッセージもある」

360個の紙灯ろうに書かれた手書きのメッセージは、これまでに交流してきた県の内外の子どもや若者たちから寄せられたものです。

只野哲也さん：

「追悼だけではなくて、今の夢とか率直な思いとかを送ってくださいとお願いしたんです」

中庭に設置されたのは、震災当時、大川小に在籍した児童の数と同じ108個。亡くなった子どもと今を生きる子ども、どちらにも目を向けてほしいとの思いを込めました。

そして準備の後、行ったのが・・・、災害発生時の避難経路の確認です。あの日、大川小で適切な避難行動がとられず多くの命が失われたことを教訓としています。

只野さんの挨拶:

「『亡くなった子どものいのち』。『生き延びた子どものいのち』。どちらも含めて『子どものいのちを真ん中に』置いて、子どもたちと。そしてこれまでの自分自身と向き合う時間にしてもらえたらと思います」

久しぶりに大川小を訪れた若者もいました。

### ■「悲しみの場所だけじゃなかった」只野さんたちのこれから

震災当時6年生だった浮津天音さん。校舎に足を運んだのはおよそ3年ぶりです。

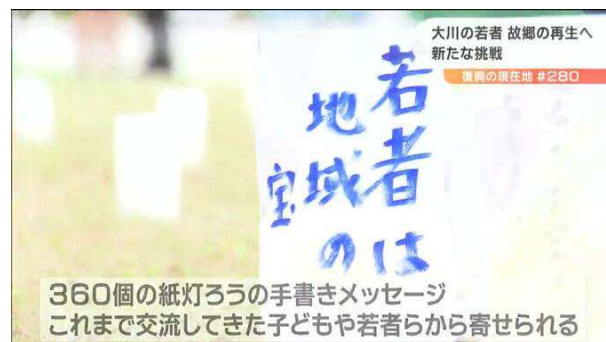
震災発生当時大川小6年だった浮津天音さん:

「無理して悲しみに来る場所ではないなというのがあったので距離を置いていたところがあった」

大川と距離を置いた経験がある只野さんだからこそ、大川に帰ってくるためのきっかけづくりを意識していました。

浮津天音さん:

「来てよかったなと思います。ここに来て校舎を見て友達と話して、それ（悲しみ）だけの場所じゃなかったと改めて思えたのですごくよかった」



只野哲也さん:

「大川に少しでも帰ってみたいけど、帰りづらいと思っている人がいるのであれば、少しずつ自分たちがそういう人たちが帰って来られるような空間、場所、催しなんかを、規模はまだ小さいけど展開していくので、良かったら帰ってきてという感じですね」

故郷を再び子どもや若者が集える場所に。只野さんら若者たちの挑戦は始まったばかりです。